

## 第3学年3組 道徳学習指導案

指導者 大牟田市立橘中学校 教諭 木下 哲也

主題 「男女互いに理解し合って」 内容項目 2-(4) 健全な異性観  
資料名 「私のマフラー」

### 指導観

人は、男性か女性かの2つの性しかない。人がよりよく生きていくためには、当然2つしかない異性間の相互理解が不可欠である。お互いに、同性にはない異性のよさを求めて、尊重し合い理解し合って生きている。

中学生のこの時期は、異性への関心はかなり高い。しかし、同性同士の友人関係の手前、異性に対して素直に感情を表せないことも多い。しかも、昨今の青少年を取り巻く社会状況は、健全な異性観を育てるには必ずしも好ましいものではない。したがって、思春期のこの時期に、異性間でも相手に対して理解し合ったり信頼し合ったりしようとする心情を高めることは、とても意義がある。

間接資料「私のマフラー」は、中学3年生の男女のカップルが引き起こした口論を取り上げた自作資料である（「生徒作文」に仕立てている）。

主人公『私』は、「哲郎」に手編みのマフラーをプレゼントして、外出時は必ず身に付けるように約束を取り付ける。「哲郎」は約束を守っていたが、ある時破ってしまい、『私』は激怒する。「哲郎」の言い分は「『私』といっしょじゃない時は、マフラーをするのが恥ずかしい」であり、『私』の言い分は「心を込めて編んだものだし、ずっと使うと約束したのに許せない」である。結局、『私』は「哲郎はそんなふう考えていたのか」と思い始め、哲郎は「朝美ちゃん（『私』）はそんなに自分のことを思っていてくれたのか」と感じ始める。つい自分の「我」を出してしまいそうな思春期のこの時期に、ちょっと立ち止まって「お互いのことを理解・信頼しようとする態度」に触れさせることのできる資料である。

本学級の生徒は、全般的に男女の仲がよく、和気あいあいとしている。「級友のいいところは？」の回答として、「元気がある」「ユーモアがあって場を和ませる」「言葉かけがやさしい」「細かいところに気が回る」などと答えている。お互いに、自分にはない他者のよさを認め合っている集団ではある。

本活動に関する事前のアンケート調査「女子が男子に（男子が女子に）直してほしいところは？」の主な回答として次のような結果が出た。

- ・女子から男子へ：「人の失敗をからかう」「ストレートに発言しすぎる」
- ・男子から女子へ：「陰で人の批判をする」「積極性が足りない」「自分勝手」

以上のことから、男女それぞれが、お互いに理解・尊重し合ったり信頼し合ったりしているところまでには至っていないことがわかる。

そこで、間接資料「私のマフラー」を批判資料として活用し、生徒が主人公の『私』の気持ちについて考えることをを通して、異性間でも同性同士と同じように、お互いに理解し合おうとする心情を高めたい。

具体的には、次のような手立てを取る。

- ・哲郎に対して「私のマフラー」を使うことを強制する『私』の気持ちを考えさせる場を設ける。
- ・「私のマフラー」を使っていなかった哲郎に対して怒った『私』の気持ちに、賛成か反対かを考えさせる場を設ける。
- ・ケンカをしたのに『私』の気持ちは哲郎の言葉で落ち着いていくが、その時の『私』の気持ちをとらえさせる場を設ける。
- ・間接資料「私のマフラー」を（資料1）と（資料2）に分けて読ませて、主人公の『私』の気持ちの変化がいった様子がとらえやすいようにする。

### ねらい

「私」の「哲郎」に対する気持ちについて考えることをを通して、男女がお互いに理解し合おうとする心情を高める。

指導過程

学習活動・内容	指導上の留意点				
1 本時の学習のめあてを確認する。					
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: fit-content;">                     「私のマフラー」を読んで「私」の気持ちについて考えよう。                 </div>					
<p>2 資料「私のマフラー」を読んで、『私』の気持ちについて考える。</p> <p>(1) 資料1「私のマフラー」の前半を読んで考える。 (発問1) 「出かける時はいつもこのマフラーを巻いて行ってよねと言った『私』はどんな気持ちだったか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 哲郎のことが本当に好きだ。</li> <li>・ あったかくして体を大切にしてほしい。</li> <li>・ いつも助けてくれてありがたい。</li> </ul> <p>(発問2) 「ねえ、どうして、あのマフラーしていないの？と哲郎に対して 怒った『私』をどう思うか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大好きな哲郎が約束を破ったので当然。</li> <li>・ 哲郎の恥ずかしいと思う気持ちを理解していない。</li> </ul> <p>(補助発問)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">                 どうして『私』のことをそう思うのか？             </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 会話文が多い資料なので、臨場感を持たせるために、テンポのよい範読を録音したテープを準備して、それを聞かせる。</li> <li>・ 印象に残った部分に、線を引くように指示する。</li> <li>・ 『私』は「哲郎」に対して感謝の気持ちを表したかったので、なぜマフラーをプレゼントしたいと思ったのかを考えさせる。</li> <li>・ 「肯定的な意見」「否定的な意見」に分かれた反応を座席表にメモしていき、両者の意見対立のための指名に役立てる。</li> <li>・ 生徒の意見対立が活発になるように、肯定的な意見と否定的な意見を、必要に応じて交互に発表させる。</li> </ul>				
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">肯定的な意見</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">否定的な意見</td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「哲郎」が「朝、家を出る時、巻いて行こうかなって思ったよ」と言っているので『巻いていく気持ちはあったんだ』</li> <li>・ 「不器用な私がせせと編んだんだから」という苦勞に対して『哲郎は何とも思っていない』</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「お出かけする時は使わせてもらおうよ」と約束をしていたのに『哲郎は約束を破った』</li> <li>・ 「マフラー編んでって頼んでいないし」と言っていて『哲郎は苦勞して編んでもらったことを何とも思っていない』</li> </ul> </td> </tr> </table>	肯定的な意見	否定的な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「哲郎」が「朝、家を出る時、巻いて行こうかなって思ったよ」と言っているので『巻いていく気持ちはあったんだ』</li> <li>・ 「不器用な私がせせと編んだんだから」という苦勞に対して『哲郎は何とも思っていない』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「お出かけする時は使わせてもらおうよ」と約束をしていたのに『哲郎は約束を破った』</li> <li>・ 「マフラー編んでって頼んでいないし」と言っていて『哲郎は苦勞して編んでもらったことを何とも思っていない』</li> </ul>	
肯定的な意見	否定的な意見				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「哲郎」が「朝、家を出る時、巻いて行こうかなって思ったよ」と言っているので『巻いていく気持ちはあったんだ』</li> <li>・ 「不器用な私がせせと編んだんだから」という苦勞に対して『哲郎は何とも思っていない』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「お出かけする時は使わせてもらおうよ」と約束をしていたのに『哲郎は約束を破った』</li> <li>・ 「マフラー編んでって頼んでいないし」と言っていて『哲郎は苦勞して編んでもらったことを何とも思っていない』</li> </ul>				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 双方の意見を聞きながら、「感情グラフ」で、「肯定側寄り」か「否定側寄り」かを表示する。</li> </ul> <p>(2) 資料2「私のマフラー」の後半を読んで考える。 (発問3) 「最初に『私のマフラー』をしてくれた日の映画を、また哲郎と見に行きたいなと思い始めた時の『私』はどんな気持ちだったか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ お互いの「感情グラフ」の表示を見ながら、必要に応じて、生徒同士の指名による意見交流を促す。</li> <li>・ 『私』が哲郎の気持ちをわかってきたことに気付かせるために、『私』に対して肯定的な見方をしていた意見を、振り返らせて発問する。</li> </ul>				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 哲郎のことを許してあげよう。</li> <li>・ けんかしてしまったけど、いつもの仲良しの関係に戻りたいな。</li> <li>・ 哲郎の気持ちがわかってきた。自分の気持ちばかりを押しついたらいけないな。</li> </ul> </div>					
3 本時の活動で学んだことを書く。	・ 2～3名の生徒に発表させてまとめる。				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ くんが発言で、少しは「哲郎」の気持ちがわかった。</li> <li>・ さんの意見を聞いて、「私」に対しての肯定的な気持ちから、少し否定的になった。</li> <li>・ お互いに自分の素直な気持ちを言い合える二人はすごい。</li> <li>・ 相手のことを理解してあげようとする気持ちは大切だ。</li> </ul> </div>					

- 「これ、クリスマスプレゼント。下手だけど、一生懸命編んだから、使ってね。」
- 「うわ～。すげ～長いマフラー。」
- 「何よ。言うことはそれだけ？ も～（手編みのマフラーの長さと言情は比例するって、知らないのかしら...）」
- 「ごめん、ごめん。ありがと、朝美ちゃん。大事に使うよ。」
- 「ちゃんと使ってよね。これから段々寒くなるんだから。」
- 「はい、はい。出かける時は、必ず使わせてもらうよ。」

私と哲郎は、中学3年生。今日は、二人が待ちに待っていた映画の公開日。待ち合わせ場所は、いつもの公園のベンチ。そこで、私は哲郎にマフラーをプレゼントした。

私達は保育園の頃からの幼なじみでもある。お互いに考えていることは大体わかるので、気軽に声を掛け合っている。自分で言うのも恥ずかしいが、いい関係なんじゃないかなと思う。

つい先日終わった期末テストでは、お互いの苦手教科を教え合った。哲郎は、数学が大の苦手である。私は哲郎に数学の特訓をした。時間を計りながら、基本問題を何度も繰り返しやってもらった。その成果が、平均点を20点上回る85点。

- 「朝美ちゃん、ありがと。数学でこんな点数夢みたいだ。」
- 「よかったね、哲郎。いつも、色々助けてもらってるから、お役に立ててよかった。」

哲郎は哲郎で、日頃いろいろな面で助けてくれる。苦手だった英語の点数が、平均点を超えるようになったのは、哲郎のおかげである。英語の勉強ではお世話になりっぱなしだ。彼に何かお礼をしたかった。手編みのマフラーをプレゼントしようと思った。不器用な私は、かなり苦労した。母から教わりながら、まさに試行錯誤だった。弟にばかりにされながらも、何とかこの日に間に合った。

しばらくたって哲郎とまた映画を見に行った時、哲郎はあの「私のマフラー」を巻いていた。映画館の中でも、マフラーを巻いたままだった。横目でちらちら伺いながら、その日の映画は、あまり頭の中に残らなかった。その次に哲郎と会った時も、その次も、そのまた次も、哲郎は「私のマフラー」を巻いていた。

年が明けて、元旦。高校受験の合格祈願を兼ねて、哲郎は友人の2人と近所の神社へ初詣に出かけた。私は私で、親友の2人といっしょ。お詣りの後、ばったりと哲郎のグループと会った。

んっ？ 「私のマフラー」を巻いていない。この冬一番冷え込んだこの寒空なのに。

- 「ねえ、どうして、あのマフラーしてないの？」
- 「ん～ だって、恥ずかしいよ。みんなの前でするのは。」
- 「どうして恥ずかしいのよ。私といる時は、ちゃんとしているのに。」
- 「朝、家を出る時、巻いて行こうかなって思ったよ。でも、今日は和久と浩之といっしょなんだ。なんか恥ずかしいよ。朝美ちゃんとふたりでいる時は、ちゃんと巻いてるからいいじゃんか。」
- 「出かける時は使うって言ってたでしょ？ 使ってもらわなきゃ、苦労した甲斐がないわよ。」
- 「おいおい苦労の押し売りかよ。別に、おれ、マフラー編んでって頼んでなんかないよ。」
- 「ちょっと！ 哲郎！ 何て言い草なの！ あんたなんか... 大っ嫌い！」

私は「大っ嫌い！」を何度も何度も叫びながら、後から後からこぼれてくる涙を拭いもせず、公園へと走っていった。とにかく、哲郎のそばから離れたくて、脇目もふらず駆けていった。

「哲郎なんて大っ嫌い！」 何回も心の中で叫びながら、公園のベンチにうなだれて座った。

「 哲郎って、そんなふうに考えていたんだ...

私と会う時は、いやいやながら、マフラーをしていたわけ？ いや、うれしそうにしていたはず。ずっと哲郎のことを見てきたから、私にはわかるもん。ちゃんと使いたいと思ってたわ。でも、他の人といっしょの時は、マフラーをするのが恥ずかしいって言ってたのも本心だわ。どうして、2つの顔を見せなきゃいけないのかな... 」

涙が枯れ果てたら、そんなことをつぶやいていた。気がつくやうに、いっしょに初詣に来ていた親友の2人が、すぐ後ろに立っていた。私を心配して、追いかけて来てくれたらしい。涙が枯れるまで、ずっとそばで見守ってくれていた。

ふと、晶子(2人の親友のうちのひとり)が言った。

「 ねえ、朝美。あんたを追いかけてきたら、哲郎君が何か言ってたわよ。朝美、あんた達やっぱりお似合いのカップルね。 」

「 こんな最悪のケンカしたのに、何がお似合いよ！ 哲郎は何て言ったの？ 」

「 まあ、聞きなさいよ。あなた達は、保育園の頃からずっと仲良しだったでしょ？ みんなうらやましがっているわよ。あんなつまらないことで、お互いのいい関係がだめになるなんて、ばかみたい。あなた達は、いつでもいっしょで、いつでも助け合ってたじゃない。いつか私に言ってたでしょ。お互いの進路希望は違っているけど、自分の進路に向けて頑張ろうって励まし合ってた。別々の高校へ行っても、自分達の関係はずっと今のままだ。私それ聞いて、何てうらやましい2人の関係なんだろうって感動しちゃった。 」

晶子の言葉で、少しずつ私の気持ちは落ち着いていった。きらきらした目で、自分の将来の夢を語っていた、哲郎のかっこいい姿を思い出した。

晶子は、少し間をおいて、哲郎が晶子達になんて言ったのかを話してくれた。次のようなものだったらしい。

「 朝美ちゃんって、そんなふうに考えていたんだ... 朝美ちゃんと会っている時、ちゃんとマフラーしてて、いつも使っていることをわかってもらえたはずなんだけど。いつも使っていることで、朝美ちゃんはうれしそうだし。朝美ちゃんがうれしそうだと、おれもうれしいし。

でも、他の人といっしょの時は、つい、使わないってこともあるよな～。それに、男子同士でいる時は、女子からのプレゼントを身に付けるのは、やっぱり恥ずかしいよ。『見せびらかしてる』って思われるのいやだし。それでも、やっぱり、ずっと使ってもらいたかったんだ... 」

私は、最初に「私のマフラー」をしてくれた日の映画を、また哲郎と見に行きたいなと思い始めた。

(生徒作文)

